

寂聴と「源氏物語」

竹内 紀子

瀬戸内寂聴は七十歳から「源氏物語」現代語訳を始め、七十五歳で完訳した。与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子と先人はいるが、初の出家者であり、「源氏物語」の舞台である京都に住む唯一の訳者である。なぜこの膨大で困難極まる仕事に手をつけたのか。どのようにして完成させ、一大ブームを巻き起こしたのか。人生の折々に「源氏物語」について書いた文章や対談、インタビュー等から抜粋し、寂聴と「源氏物語」の結びつき、その歴史をたどる。

1 「源氏物語」との出会い

出合いは1935年、13歳、徳島県立高等女学校の図書

館。与謝野源氏。当時、すでに日本の小説も翻訳小説もたいていのものは読んでいたが、それらと比較しても、源氏物語は際立っていた。「千年も前に書かれたものがこんなにもおもしろいなんて」と驚き、夢中で読みふけた。

「出逢い」 (わたしの源氏物語) 1987.1.10 読売新聞

はじめて源氏物語を読んだ日を、わたしはなぜかはっきり記憶している。

今から半世紀も昔のこと、晩春の雨の土曜日の午後だった。昭和十年（一九三五）、わたしは十三歳で、その春、徳島県立の女学校に入ったばかりの一年生だった。入学してすぐ陸上部

に入れたので、毎日放課後は日が暮れるまで、練習があったが、その日は雨なので、練習がなかった。真っ直ぐ家へ帰る気にもなれず、体育館の隣に建っている図書館に入ってしまった。そこでは生徒が自由に書庫の棚の本を取り出して選び、それから借り出しの手続きをして、階上の閲覧室で読むという規則になっていた。

わたしは書庫に入り、棚の本の背文字を眺めていった。壁ぎわから二列めの本棚の上から三段目に、その本があった。

「源氏物語 与謝野晶子訳」という文字が、わたしの目を引きよせた。与謝野晶子の明星派の歌に、その頃のわたしは魅せられていた。わたしはその本を抜き出し、階上に行った。閲覧室には四、五人しか生徒はいず、静寂がみちていた。窓ぎわに席をとり、雨空を見上げてから、わたしは厚い本を開いた。

「どの天皇様の御代であったか、女御とか更衣とか言われる後宮がおおぜいいた中に、最上の貴族出身ではないが深いご寵愛を得ている人があった……」

読みやすい歯切れのいい文章に案内され、わたしは一気に源氏物語の世界に引きこまれていった。

「もう時間ですよ」

と、声をかけられた時は、生徒は誰もいなくなっていた。本の館外貸出しは禁止されている。

それ以後、わたしは与謝野源氏を買いもとめ、学校にいる以外のすべての時間をあてて、熱狂的に読み終えた。

世の中にこんな面白い小説があらうかと思った。すでに文学少女だったわたしは、岩波文庫などで、外国の小説も読みあさっていたが、トルストイやフロアベルにも紫式部は負けないと感嘆した。

2 紫式部の生家近くで暮らす

高等女学校卒業後、東京女子大に進み、よく図書室では古典を読み源氏や西鶴は面白いと思っていた。結婚して北京へ。そして出産。終戦後、徳島へ帰り、初めての恋と新しい文学に出合う。一家で東京に移るが、夫と子を残して出奔、友人の住む京都にたどり着き、作家を志しながら、出版社や付属病院に勤めた。その下宿が、廬山寺のすぐ近所であった。後年、そこが紫式部の生家であったことが判

明する。

「紫式部の生まれ育った家」・「不思議な縁」

『痛快 寂聴源氏塾』2004.3.31 集英社インターナショナル刊

紫式部の生家は長らく所在地が不明とされていたのですが、戦後になって角田文衛氏の考証によって京都市上京区寺町通広小路上ル、正確には上京区北之辺町三九七番地であると判明し、それが今では定説になっています。

今、この場所には廬山寺があるのですが、その広い境内全域がその邸であつたろうと言われています。

紫式部は、この場所で生まれ、育ちました。

当時は結婚後も女性は生家に暮らし、そこに夫が通ってくるのが一般的で、式部の夫宣孝も中川のわたりにあつた式部の家に通つたのです。式部はこの家で結婚生活を送り、夫の死後もここで一人娘を育てながら、源氏物語を執筆したのでしょう。もしかしたら、死もまたここで迎えたかもしれません。

人の縁とは不思議なもので、実は私はこの紫式部の邸があつ

たすぐ近所に暮らしていた時期がありました。

私は昭和二十三年（一九四八）の二月に、家庭を捨て、夫と子どもの許から単身家出をして、京都で一人暮らしを始めました。昭和二十六年に東京に出るまでの三年間は、私の人生では最も苦しい時代だったのですが、その最後の一年間ほど、まったく偶然に廬山寺の近くに下宿をしていたのです。

そのころの私にとっては、食べることが精一杯で源氏物語のことはおろか、山紫水明の古都に住みながら、その風光を愛でたり、名刹や名所旧跡をめぐったりする余裕はなかったのです。ましてや、紫式部はあまりにも天才で偉大すぎて、いかに同じ女流作家とはいえ、式部をお手本やライバルにも考えようがありませんでした。

ところが、それから五十年あまりの歳月が経ち、私は望み通りに小説家になれたばかりか、源氏物語の訳業に挑むことになったのですから、本当に人生とは不思議なものだと思わずにはいられません。

しかし、それにしても、廬山寺の近くに住んでいたころ、もし自分が紫式部の邸の目と鼻の先に住んでいることが分かつて

いたら、同じように女一人で小説を書きつづけた式部の姿に、どんなにか勇気づけられ、あてもない自分の将来に希望が抱けただろうにと、今でも思ってしまうのです。

3 今でいえば新聞小説か

やがて二十九歳で上京し、少女小説を書きながら、「文学者」に入り「痛い靴」でデビューした後、「女子大生曲愛玲」で新潮社同人雑誌賞受賞、「花芯」の無理解バツシング、文芸誌への空白の五年間を経て、「田村俊子」で田村俊子賞、「夏の終り」で女流文学賞を受賞、作家としての地歩を築く。

1965年、43歳。対談のなかで、「源氏物語」は今で言えば新聞小説的なおもしろさがあり、週刊誌に、今、そっくり出しても結構受けるのではないか、いま紫式部がいたら、週刊誌に追っかけまわされるのじゃないかと述べている。この頃、「妻たち」、「煩惱夢幻」、「美は乱調にあり」を連載しながら、短篇も発表する、寂聴こそ週刊誌に追いつけられる「流行作家」であった。

また三島由紀夫・竹西寛子とともに「源氏物語」を論じ、紫式部は「怪物ですね」と語り、そしてその構成、布石の打ち方など「女らしくなく、しゃくにさわるくらい頭が建築的」と述べている。

対談「平安の女性たち」より

瀬戸内晴美（作家）

土田直鎮（第五卷著者・東大史料編纂所所員）

『日本の歴史5 王朝の貴族』1965年6月 中央公論社刊 付録

瀬戸内

これはわたくしの考えなんですが、「かげろふの日記」はいまで言えば純文学と思うのです。「源氏物語」はいまで言えば新聞小説じゃないかという感じがするのですけれども、どうでしょう。いかにも源氏を大文学のように言いますけれども、書きかたにしろ新聞小説のおもしろさがあって、週刊誌にいまそっくり出してきても結構受けるのじゃないかと思うんですけれども。

一年はゆうに続きますね。週刊誌は一回十八枚ですから。それに大長篇といえますけれども、場面がパツパツと変わって

いつて、どこか一つの章だけをとても結構読めますでしょう。週刊誌の小説はそうじゃなければいけないんですよ。一つの小見出しで一回ちゃんと終わっているという、そういう形がとてもうまいですね「源氏」は。

「座談会『源氏物語』と現代」より

出席者 三島由紀夫

瀬戸内晴美

ききて 竹西 寛子

「文芸」 1965年7月号

瀬戸内

私は紫式部はきらいなんです（笑）。なんか憎ったらしくて、高慢ちきな感じがして、だいたい小説を書く女というのはきらいなんです。そういう意味で現代の小説家も、女の小説家というのは、みな感じが悪いと、自分を含めてそう思っているのですよ。その元祖でしょう。だから非常にいやなやつだと思う（笑）。紫式部に比べると、清少納言のほうがずっとおバカちゃんで、かわいいでしょう。和泉式部はもったかわいらしくって……。

4 円地源氏の執筆過程をつぶさに見る

1967年、45歳。 住まいを京都に移し、仕事場を目白アパートにかまえていた。そこへ円地文子が現代語訳に取り組むために移ってきた。幾度も大病に見舞われ再三の入院をくり返しながら仕事を進める姿に強烈な刺戟と影響を受ける。また、解釈のユニークな発見や表現上の新しい試み、源氏の登場人物への人間観などを聞く時間は、望外の暮しの余得であったと記している。

「ある歳月」

（『円地文子訳源氏物語』 月報 1972.10 新潮社刊）

円地源氏の壮拳に手がつけられるとはじめて聞いた時から何年になるだろう。その頃私は目白アパートを仕事部屋にしていた。そこには谷崎潤一郎氏が、熱海の家を建てられている間、仮の宿にしていられしやう、氏は私と同じ階に仕事部屋を持たれ、別の階に夫人やお手伝いさんをひきつれて棲まわれていらつしやう。私は憧れの文豪とはからずも一つ屋根の下に住む幸運を得て、有形無形の刺戟を受け、心は常に昂揚していた。

それから間もなく、ある日、円地文子氏がお嬢さん御夫妻と共に私の部屋を訪ねられた。

『源氏物語』の現代語訳の仕事にいいよ本格的に取り組むため、目白台アパートを仕事場にしたいとの希望を話された。私の部屋をモデルルームとして下見に来られたのであった。

本は新潮社から出すと聞かされた。それから四、五年、円地氏は週の方を目白台でござされ、連載小説など一切断られ、一意専心源氏に取り組まれた。私ははからずも、『源氏物語』の現代語訳という壮举をなしとげられた二人の文豪と一つ屋根の下に棲む光栄な運命に見舞われたことになった。

その仕事にかけられた円地氏の意欲は並々でないものがあり、その決意と、自信と、情熱を私は、身近にいてつぶさに全身に浴びて暮した。私の生涯にとって、忘れられない貴重な経験をさせてもらった時期であった。

円地源氏は最初の予定よりはるかに出来上りの時期が延びた。その間に円地氏は幾度も大病に見舞われ再三入院を繰り返された。一時などは失明の危険にまで見舞われた。しかしその間も一日として、円地氏がこの仕事をあきらめたり、なげたりしたことはなかった。あの人並より小さな、きゃしゃな、骨細の軀のどこにこれだけの強靱な意志と激しい情熱と意欲がひそ

められているのだろうと、私はひたすら驚嘆して、この大先輩の凄まじい生命力の爆発を眺めていた。それは谷崎氏と住んだ時の精神の高揚などとは比較にならない強烈な刺激であり、影響であった。

時々、厳しく私の仕事ぶりを叱咤されることがあった。そんな時なぜか私はちつとも怖くなく、なつかしさを感じるのだった。

私は折にふれ、源氏の進行度や解釈のユニークな発見や、表現上の新しい試みや、源氏の登場人物への人間観などを聞かせていただいた。それは私にとっては望外の、この上ない暮らしの余得であった。

やがて、私はどこよりも長年住み馴れた目白台アパートを出ていった。もう円地源氏は、宇治に入っている頃であった。

なぜ出るのかと、円地氏はとても淋しがって私との別れを惜しんでくれたし、その語調には源氏の終るのを見とどけるまでなぜひつしよにいないのかという不審さをかくした不満が感じられた。私は曖昧なことをいい、円地源氏とのなつかしい日々

に別れた。

今となつては、何をかくそう、私は円地源氏の強烈なエネルギーの照りかえしに圧倒されて、自分を確立しておくために、

円地源氏の仕事場から逃げたのである。

ミューズの神は、一つ屋根の下に二人の芸術家は置かないと
いったのは岡本一平だった。

5 紫式部の心理に迫る

1972年、50歳。紫式部になったつもりの日記風の作品を発表する。「私の源氏物語が千年も読まれ、世界じゅうの人々に理解されているというのは、おそらく物語のかけにかくされた私の心の凄まじい空虚と嘆きの声が、読む人の心にからみつくからではありませんまいか」「私が書きたかったのは千差万別ひとつとして同じもののない人の心理の動きなものでした」と内側から、紫式部に迫っている。

「偽紫式部日記」

〔新潮〕 1972年8月号

清少納言や和泉式部や、赤染衛門と比べて、私の書いた物語が、彼女たちの書いた物より、はるかに多く読まれ——まことに正直に申し上げて、私の書いたものが千年もの長い生命を

保ち、私などの想像も及ばなかった世界の涯々の国の人々にまで読まれ、ぼうぼうの君などという、とつ国のすぐれた女哲学者とやらにまで愛読されているなど、千年前の私が想像もしたことでしょうか。——価値高く扱われているというのも、私の人知れず流した涙や、心の苦悩の度が、あの方たちよりも深かったせいかもしれないと思います。

中略

物語は才気や学問だけでは書けるものではありません。物語は心の不如意の怨念や、淋しさや苦しみや、嫉みや卑下や、後悔などの劣情の、もろもろの瘴気の中から幻のように生れでてくるもののように思われます。

中略

私の源氏物語が千年も読まれ、世界じゅうの人々に理解されているというのは、おそらく物語のかけにかくされた私の心の凄まじい空虚と嘆きの声が、読む人の心にからみつくからではありませんまいか。源氏物語を華やかな愛欲絵巻と観じる方は、書き手といたしましては嬉しい読者ではありません。しかし一たび書かれて作者の手を離れてしまった作品は、誤解の海に放たれた小舟のようなもので、あらゆる偏見と誤解の大波小波にもみぬかれる運命のように思われますので、私は作品の批評を

さほど気にかけないことにしております。

中略

人は死すべき者として造られ、この世に生を享けた瞬間から、老いと死だけに向かつてひたすら流されつづけねばならない運命を担わされております。その僅かな生涯に、栄華を極めようが位人臣を上りつめようが、所詮は、路上の野ざらしと同じ白い一にぎりの骨になるだけなのです。このはかない人の世に、生きていけるしるしに、人は恋をし、裏切り、裏切られ、いじらしくはかない喜憂に眉をひらいたりうなだれたりして日を送っております。私に興味があるのは、こうした人間のかかわり方ではなくて、彼等がつくられた肉体の中に封じている心理の綾なのです。造物主はひとりとして同じ顔の人間を創らなかったと同時に、そのただひとつしかない肉体という容器の中に、やはりただひとつしかない心を封じて、この世に送り出しているのです。

私にとって人間の運命はさほど興味をそえられる問題ではございません。私が書きたかったのは千差万別ひとつとして同じもののない人の心理の動きなのでした。心の冷熱の度合なのでした。流転する人生と、流転する心理の刻々を捕えて、書き残してみなかったのです。

6 出家して発見する

1974年 52歳。51歳で出家したことにより、さまざまな発見をし、新しい解釈が生まれた。生活は源氏物語の舞台である京都中心になる。紫式部は5人の主要な女たちに出家させているが、それぞれ源氏とちぎった女たちであり、不義の恋をした女たちであり、不倫の罪をつくらせた男の方に、自分が裏切った男よりも心ひかれていることに特色があると記している。

「源氏物語の女たち」

〔朝日新聞〕連載 1974年4月～1975年4月より

源氏物語の中で、紫式部は五人の主要な女たちに出家させている。藤壺と空蝉と、朧月夜と、女三宮と、浮舟である。

源氏死後を書いた宇治十帖の浮舟以外はそれぞれ源氏とちぎった女たちであり、しかも、一人残らず不義の恋をした女たちである。

源氏の子供の薫と、源氏の孫の匂宮との愛を共に受け入れてしまった浮舟もまた、尋常でない不義の恋に悩まされたという

ことになる。

この外に秋好中宮や紫の上も、強い出家願望があったと紫式部は書いているが、この二人には出家させていない。

そのところが私には面白いと思われる。

藤壺は、源氏の父の桐壺帝に、源氏の生母桐壺更衣が亡き後、面影が似ているということで入内し、帝の寵愛のめざましい人となる。三歳で生母を失った源氏は、亡き母に似ているといわれる藤壺にあこがれを抱き、やがてそれは恋の思慕に変わっていく。五つ年上の父の寵妃と源氏はついに不倫の密会をとげ、そのあかしの子を藤壺はみごもってしまう。桐壺帝はそれと知らず、不義の子は源氏の弟として育てられる。桐壺院の崩御後の一周忌が果ててもなく藤壺は法華八講を催し、その儀式は極楽を思わせるようにした。四日めの結願の日に、藤壺は突然、自分の出家を仏前に披露し、参会者を驚かした。もはやだれもとめることが出来ず、伯父に当たる横川の僧都が召され、黒髪がおろされた。その時「宮の内ゆすりて、忌々しう泣き満ちたり」と表現され、人々の泣き悲しんだ様が伝えられている。藤壺は、秘密の罪をざんげし、故院の死後も懸想してやまぬ源氏の邪恋をさけるためだれにも相談せず決行したのであり、それは自分の源氏への恋も、その行為によって断つことをひそかに

仏に誓ったといえよう。

空蟬も伊予守の妻であるのに、源氏に執拗にいいよられ、ついに一度許してしまう。夫の死後、継子にいいよられるのもうるさかったのが直接の原因のように見えるが、実は源氏との恋の秘密が空蟬を出家にふみくらせたとみていいだろう。これは「人に『さなむ』とも知らせで、尼になりにけり。人々、『いふかいなし』と、思ひなげく」とあつさり記されている。

朧月夜は源氏を憎む弘徽殿女御の妹にあたる上、桐壺院と弘徽殿女御の間に生まれた東宮（源氏の異腹の兄）のおもい者なのに源氏が手をつけてしまい、しかもその密会の現場を雷鳴の暁発見されてしまう。

そのため、源氏を政敵とみなす右大臣一家におとしめられ、須磨へ配流の憂きめをみるのだが、やがて源氏の世にかえって、京にもどつてからも、まだ朧月夜とはひそかな関係がつづいていた。

朧月夜を源氏に盗まれた朱雀院（源氏の異母兄）も、朧月夜に先だち出家して、娘の女三宮を源氏に託している。源氏は稚純な女三宮を一応大切にするが、紫の上へのような愛はわかない。その女三宮に柏木が思いをかけ、源氏の目を盗み、不義をとげ、女三宮は柏木の子をみごもってしまった。源氏は自分の

罪の報いをうけ、はじめて女に裏切られた苦しみを味わう。そのことから、誘えば拒みきれない臘月夜の女としての弱さまでうとましくなり、疎遠になる。臘月夜は、これまでも出家の思いを、源氏の愛にさまたげられてとげずに来たため、今度は源氏にも告げずこっそり決行してしまった。後になって人づてにその事を知り、源氏は驚き、無視されたことを情けなく思う。

女三宮は罪の子をみごもり、子供のように素直で、思慮の浅い頼りない感じの女だけれど、女三宮はそれだけに心ひとつに苦しんでおり、出産の後、出家への志が強くなり、出家した父の朱雀院が山から見舞いに下りてきた時、「見舞いに来たついでに私を尼にして下さい」と懇願する。朱雀院も源氏もしきりに思いとどまらせようとするが、女三宮はききいれない。おとなしい女三宮にしては思いがけない強情をはり通し、出家を主張し、ついに朱雀院はその強い志に負けて出産のため集まっていた僧に授戒のことをいそがせ、女三宮は出家してしまう。

そのことを伝えきいた柏木は病気が重なり、悩み死んでしまう。

浮舟もはじめ薫の愛を受けた上に、匂宮の誘惑に負け、ふたりの愛にはさまれて苦しみ、宇治川へ身を投げようとして、横川僧都に助けられ、その手によって出家してしまった。紫式部

の書く女たちは、不倫の愛に流される時、不倫の恋の相手を憎からず思い、むしろ、罪をつくらせた男の方に、自分が裏切った男よりも心ひかれていることに特色がある。人間の煩惱の不思議をそういうものとして紫式部はとらえていた上で彼女たちに出家させているのが私には興味深い。

7 宇治十帖と仏教

1975年、53歳。宇治十帖では、初めから終わりまで仏教が顔を出すということに気づく。宇治十帖は正篇の光源氏を主人公にした物語が終わったのち、ある歳月を置いてやはり紫式部が書いたものではないのだろうか、彼女も出家したのではないかと記している。

「宇治紀行」―浮舟の悲劇を追って―

『山河漂泊』 1975年7月25日 平凡社刊

今度読み返してみても、いままで気づかなかったことを発見し

たのは、宇治十帖では、始めから終わりまで仏教が顔を出すことであった。

正篇のほうでも、登場人物たちは、病気といえは加持祈禱をしているし、源氏と関わりがあった女たちでも、藤壺、空蟬、朧月夜尚侍、女三の宮が出家しているし、朱雀院も出家している。源氏も、秋好中宮も紫の上も、常に出家願望を抱いている。しかし、正篇では、長い物語のなかに、それらの話はどこどころにちりばめられていて、それほど物語は抹香臭くはなっていない。

ところが宇治十帖になると、登場人物がぐっと減っているにもかかわらず、「橋姫」から「夢浮橋」までの十巻に、仏と出家とかいうことが出ない巻はない。

光源氏は、時々八講をもよおしたりするし、晩年には出家の願望もあるなどとほのめかしているが、全篇を通じてきほど宗教的な性格には描かれていない。一方、宇治十帖の主人公薫は、終始、ハムレット型の内向的な性格に描かれ、宗教に憧れる心が強く、仏教への関心もなみなみでなく描かれている。ヒロインの浮舟を最後に尼にしてしまつて、この物語は終わるのである。

身は俗に置きながら、心はもう聖に近く、深く仏に帰依して

いた八の宮や、そういう八の宮の心情に憧れていく薫の心は、紫式部その人の心情と、解釈していいのではないだろうか。

宇治十帖は、正篇の光源氏を主人公にした物語が終わつたのち、ある歳月を置いてやはり紫式部が書いたものではないのだろうか。式部の晩年がどうなったか、当時の宮廷の才女たちの行方と同じようにさだかではない。四十歳を若干出たころまで生きていたらしいというが、これほど出家に憧れていた式部は、宮仕えを退いたのち、かねての念願を果たして、どこかの山かげでひっそりと、案外長生きしていたのではないだろうか。

8 「源氏」の女たちに語らせる

1984年、62歳。「女人源氏物語」を「本の窓」に1989年3月まで連載する。「私はもし、作中の女たちが口を開いたら、どういうことを言うだろうかという妄想にとり憑かれるようになった。女たちの心に身をひそめて、その口を開かせてみたいと思った」と「女人源氏物語」を書くきっかけを記し、「彼女たちの声にひっそりと耳を傾けながら、私はこういう女たちを千年前に生み出した紫式

部の天才に、今更ながら驚嘆しつづけた」と月報では記している。

「女人源氏物語」前書き

（本の窓） 1984年12月20日 小学館

円地文子の「円地源氏」が生まれるとき、私は東京の目白台のアパートで、その生みの苦しみと、誕生の喜びを、つぶさに身近で見る幸運をめぐまれた。

円地文子さんは、源氏物語を口語訳にする仕事場として、当時、私が仕事場に使っていたそのアパートの一室を選ばれたからであつた。

私たちは、毎日のように源氏物語について、主人公光源氏について、また彼をとりまく衛星のような女たちについて、飽くことなく語り合つた。

円地さんは、そのたいへんな仕事のため、二度も視力をうばわれそうな大病をなさつた。

源氏物語というのは、とり憑かれた人間にとつて、おそろしい、魔を秘めた物語だと思つた。

その頃から、私は源氏物語の中で一番好きな女はと訊かれる

と、即座に六条御息所をあげていた。いつか私なりの源氏物語を、訳ではなく、なぞつてみたいと考えるようになった。

源氏物語では、主人公はあくまでも光り輝く源氏であつて、女たちはすべて輝かせる副主人公にすぎない。私はいつの頃からか、光源氏の運命を彩る女たちの本音を訊きたいと思うようになった。

紫式部は女性の目で、光源氏を理想の男性として描き、彼に對しての筆はあまく、同性の女たちには、つとめて冷静で、ある場合は辛辣でさえあるように思われた。女たちへの批評も、男性の眼で表現されることが多い。

私はもし、作中の女たちが口を開いたら、どういうことを言うだろうかという妄想にとり憑かれるようになった。女たちの心に身をひそめて、その口を開かせてみたいと思つた。

源氏物語では、欠点のある女として描かれている人たちに、私は理想的な女として書かれた人たちより、多く心を惹かれる。たとえば、六条御息所、朧月夜の内侍、女三の宮、末摘花、葵上、浮舟など…。

彼女たちは、嫉妬深かったり、身持ちが軽々しかったり、思慮が浅かったり、心の彩が少なかったりする。だからこそ、女らしく、可愛らしく、いとしく、魅力的なのである。理想の女

性として描かれる、藤壺后や紫上や明石の君が、私に必ずしも彼女たちより立ち勝って魅力的とは見えないのである。

光源氏は多くの女たちを愛したが、彼女たちは、ひとりとして、幸福になっではない。紫式部は、彼女たちが、不幸だとは、あえて言っていないが、作中の女たちが本音をもらせば、はたして幸福だったと言うだろうか。光源氏から最も愛された紫上でさえ、私には悲劇の女のようにみえてならない。もしかしたら、最も救いのない晩年だったのではないだろうか。好きな六条御息所から、私は、こつこつ、源氏物語の女たちの低いひとりとに耳を傾けてゆきたいと思う。

秋山虔氏との巻末対談より

瀬戸内

『女人源氏物語』(二) 1989・4・10 小学館刊

今日流行する、作品と作者を切り離すという見方からは少し問題かも知れませんが、紫式部もまたブライドの高い女で、愛の不如意を味わって屈辱を感じた、そこから小説が始まっていると、実作者の立場から私は思います。

(中略)

宇治十帖は、女が男によって女になるということを、あの時

代に紫式部がちゃんと書いたという点で凄いいと思いますね。

(中略)

浮舟が薫の世話を受けていても、薫では女として開花しなかったものが、匂宮によって女になったという、そのことがよくわかるように書いてあるでしょう。素晴らしいですね。

橋本治氏との巻末対談より

瀬戸内

『女人源氏物語』(四) 1989・6・10 小学館刊

私はくり返し「源氏物語」を読んでいるうちに、どうしても紫式部は結局、光源氏を書きたかったんじゃないかと、その周りの女人たち、要するに自分の同性を書きたい、同性にこと寄せて本当は自分を書きたかったのだと思ったのです。作家ってみんなそうでしょう。

丸谷才一との巻末対談より

『女人源氏物語』(五) 1989・8・10 小学館刊

丸谷は、浮舟は可哀そうで仕方ないと思っていたが、寂

聴が、あれは仏門に入って救われたから幸せなんだといっているのを知り、ショックを受けたが、そういう考え方も確かにあると語る。

瀬戸内

私自身は、私の実感としては浮舟は救われたと思っていました、そのように書いたままでなのですが、いまお話を伺っていて、ああ、そうか、そんなに簡単に言うてはいけないことだったのになって、ちょっとびっくりしてるんです。

(中略)

もちろん出家する前から「源氏」は読んでましたが、出家してから読み返して、はっと思ったことがいっぱいあるんです。

出家する前は、本当にももしろい小説だと思って、ただもう筋につられてね、紫式部ってうまいなあって感じで読んでいたんですよ。出家してから読んでみてね、それまで女たちは、私は紫上がいちばん愛されていて、「源氏物語」は紫上の物語ともいわれるくらいで、彼女は女たちの中ではいちばん幸せな人だと思っていたんですね。でも、いまの私の感じでは、「源氏」に出てくる女たちの中で、いちばん不幸なのは紫上のような気がするんです。

それは何故かというと、彼女は非常に出家したがってましたよね。それで何度も何度も出家させてくさいって言うんです。でも源氏に止められて、やめさせられます。ところが紫上以外の女たちは、光源氏と一緒に住んでないから、出家したいと思った時に、スバツとしちゃうんです。

例えば女三の宮のような、小説の中では非常に思慮の浅い、女としての魅力がないように、しきりに光源氏に言わせているのだけれども、出家するときは毅然としてするんです。

突然ね、何が何でもしちゃうでしょ。光源氏はとりすがって、よよと泣いてね、なにか急に惜しくなって、なぜ私を捨ててゆくのか、なんて言うでしょ。

でも女たちは全部、出家した段階で心の丈が光源氏を超えるんです。その時、光源氏はとてもみじめに見えます。

9 現代語訳にとりかかる

1987年、65歳。岩手県の手台寺住職に就任(2005年まで18年間)。天台寺は「源氏物語」の注釈を書いた長慶天皇の墓がある。

「わたしの源氏物語」を読売新聞に連載する。

1988年、66歳。福井県の敦賀女子短期大学学長に就任。(92年3月まで4年間) 福井は紫式部が父の赴任にともない結婚前に住んだ土地である。

1992年、70歳。現代語訳にとりかかる。源氏を完成させるための覚書きノートに

- 1、健康 サンポ ヨガ 気功
 - 2、規則正しく 仕事時間決める 休みとる(土・日)
 - テッ夜しない
 - 3、仕事の整理 引き受けない
 - 4、義理をかく 誰が死んでも
 - 5、経済をひきしめる 慎ましい生活
 - 6、最後の仕事と思う
- と記している。

「歩く」

(「寂庵だより」1993・4・1)

医者には十年ほど前、心臓が悪いから、仕事は全部やめ、旅

行や講演もやめ、六十歳の老婆らしくおとなしく暮らせといわれた。日本で、一、二の心臓の大先生の御託宣だからおとなしく聞けばいいのに、私はその時、暗澹として、

「六十の老婆らしく、何をすればいいのですか」

と訊いたら、博士曰く、

「庭の草むしりでもすることですな」

私は東京のその病院から帰る新幹線の車中でつらつら考えた。どうせ、いつ死ぬかわからない命なら、阿呆らしい、草むしりなんかするものか。

そこで、それまで以上に、私はじゃかすか仕事を引き受けて駆け廻り、夜も眠らず仕事をした。

心臓の方がびつくりしたのか、あきらめたのか、それっきり何事もない。もちろん薬なんて飲んでいない。

しかし、今度はじめて私は一つの健康法に積極的に取り組んだ。理由は、『源氏物語』の仕事が、並大抵ではないとわかったからである。

円地文子さんが、『源氏物語』を訳している最中、二度も網膜剥離の手術をされた姿を思い出した。あの頃の円地さんより、今の私の方がずっと年寄りなのだ。この長丁場を耐えぬくためには、自分で健康管理をするしかない。

そこで発心したのが歩くことであつた。机にしがみついて、終日書きつづける生活は、体にいい筈がないのだ。寂庵から仕事場まで、丁度、大堰川沿いの道を歩いて一万二千歩、それを道筋によつて、五十分か、一時間弱で歩くのだ。やってみたら、実に気持ちがいい。

一時間が惜しくてたまらない気がするのを、えいっと、ねじ伏せて、歩いてみた。スニーカーに作務衣で素手で歩く。相当な早足だ。まだ、風景を楽しむゆとりはない。万歩計と時計だけを頼りに、ただひたすら歩く。苦しくなると不動真言を口ずさむ。これは呼吸法に適つていて、実に具合がいい。

一時間歩いたら、全身びっしりになつてゐる。今のところ、一週間に三度をめぐに歩いてゐるが、足腰は回ごとに軽くなる。いろんな路を試みて、思わぬ収穫がある。嵯峨野はまだまだ散歩道の宝庫だ。鶯の声を至る所で聞く。まだ幼い声だが、励ましてくれるように思うからいい気なものだ。

一時間損したように思つてゐたが、集中力がとみに増大して、仕事のはかはぐんとおびた。これで体が悪くなる筈がない。お金もいらず、仲間もいらず、一人てくてく歩くだけだから、誰に迷惑もかけない。わざとお金を持たないで歩く。途中でタクシーなんかに乗ったり、うちへ電話で助けを求めたりしないた

めた。

寂庵の女の子たちは、そのうち、一緒に歩こうといわれるのではないかとビクビクしている。

私はそんな残酷なことはいわない。独りで天地を所有しているようなあの壮大な解放感がこたえられないからである。

「源氏物語鉢かつぎ」

〔本〕1996年1月号初出・『無常を生きる』96年11月 講談社刊

源氏物語の現代語訳に取り組んで、たちまち歳月が流れ去つてしまつた。

はじめの予定では、もう何冊か発行してゐる筈なのに、まだ私は日夜、この物の怪と格闘しながら日々命を削られてゐる。私はこの仕事をしてゐることを誰にも隠さないで、よく人から、「いつ出版ですか」とか、「どこまで進みましたか」とか訊かれる。その度、私は「聞いてくれるなオッサン」といいたい心境で小さくなつてしまふ。私がなまけていて筆が進まないのではなく、私は源氏訳に取りかかつて以来、朝から夜な夜まで、夢の中までも源氏物語と四つに組んで戦つてゐるのである。鉢かつぎ姫というお伽話があるが、あの鉢をかぶつてぬげないお姫さまのように、私は源氏物語という大きな鉢をいつもすつ

ぼり頭にかぶっているような重苦しさに取りつかれている。

その重い鉢をかぶって、源氏物語の現代語訳という苦行を見事達成された大先達がすでに三人いらっしやる。

与謝野晶子氏が最初の「新訳源氏物語」を刊行されたのは、一九一二年、何と三十四歳の若さであった。それから十一年めの一九二三年に「新新訳源氏物語」の原稿約一千枚を関東大震災で焼失されている。四十五歳の時であった。それにもめげず、一九三八年、六十歳の時に、「新新訳源氏物語」の刊行開始をされているのである。その不屈の精神と努力は天才ならではのことであろう。

谷崎氏が源氏物語の訳業に取りかかれたのは四十九歳の一九三五年九月からで、脱稿されたのは、五十二歳、一九三八年九月で、年譜によれば「準備に二年、執筆に三年計五カ年を費やした」とある。刊行は更に翌年、一九三九年一月からである。与謝野源氏の「新新訳」よりわずか三ヶ月の遅れだから、ほとんど同時期と見ていいだろう。

谷崎源氏は六十四歳の一九五一年「新訳源氏物語」を、七十八歳、一九六四年新かなづかいの「新々訳源氏物語」を刊

行されている。亡くなられたのはその翌年だから、実に四十九歳から三十年間、源氏物語に取り憑かれていられたことになる。

円地文子さんの源氏物語現代語訳はくしくも、その仕事場とされた目白台アパートを、早くから私が仕事場にしていた関係から、その凄惨なまでの誕生の苦しさを、目の当りに見るという因縁を持った。円地さんがその訳業に取りかかれたのは、一九六七年七月、六十一歳からで、五年後の、一九七二年六月に六十六歳で、脱稿し、刊行されている。

(中略)

それから早くも四分の一世紀が過ぎようとしている。私は読書力の落ちた現代の若い人に、この日本の最高の文化的遺産を、一人残らず読んでほしいという、とんでもない夢にとりつかれ、これまでの三つの名訳よりも、さらに読み易い現代語訳に手をつけてしまったのである。

私もまた、訳業中、幾度か過労のあまり生命の危機にさらされた。それでも私はその度、仏の加護を信じて切りぬけてきた。苦しい道のりだったが、もうそこに見えてきたテープを切るため最後の力をふりしぼって走っている。私のこの仕事は先輩の誰よりも遅く、七十歳の十月、一九九二年から取りかかり、一九九六年、五年めに脱稿、刊行する。あとわずかの命が無事

であってほしいと思う。

1996年 12月、74歳。現代語訳第一巻 刊行。三越で「寂聴源氏新訳記念特別展」が開かれる。

「黒髪」

〔寂庵だより〕 1997年1月1日初出・『寂聴おしゃべり草子』98年1月 中央公論社刊）

平成八年十二月二十四日から三十一日まで、東京日本橋の三越本店で「寂聴源氏新訳記念特別展」というのが開かれた。

十月なかば、急に降って湧いたように決まった話なので、私はとても無理だとは思ったが、出版社と三越の取り決めに推されて、実行してしまった。

何しろ、暮の原稿や「源氏」新訳のキャンペーンが目白押しに並んでいて、出展物を取り揃えるだけでも大変な作業で、寂庵中がひっくりかえるような騒ぎになった。

展覧の場所も狭く、通路のはしつこのようなところで、私は不満でやりたくなかったが、だだをこねるのも大人気ないと思

い直し、（近頃私は年のせいとか、たいそう我慢強くなって、何かあると、怒るのは大人気ないと思ひ直すくせがついている。いいことか悪いことかはまだわからない）、とにかく出来る限りの出展品を選び出した。

荷物を東京に送り出すだけでも大変な作業で、精も根も尽き果ててしまった。さて、最後の荷を送り出し、やれやれと、久しぶりでゆっくり横になったとたん、「あつ」と私は声をあげてとび起きた。もう一つ、あった、大切なものが。私はしまいこんだまま、一度も取り出したことのない「それ」を、大切なものをしまっている厨子の中から探しだした。

それは何重にも紙や布にくるんであった。桐の箱の中から取り出してみると、二十三年の歳月がたちまち流れ去って、あの昭和四十八年十一月十四日の出家得度の日がよみがえってきた。

式の時、剃髪した私の黒髪であった。髪はあの日と全く同じ黒さと、艶やかさで、ぬめぬめと光っていた。別に、和紙に包んだ三袋があつて、それには誰かの字で、右、左、中、と、それぞれ包みの上に墨で書かれていた。剃髪の時、導師が、出家者の髪の三方から、剪り取るものらしい。

私は以前、祇王寺の智照尼のことを小説に書かせてもらい、

その折、取材して、智照尼から、剃髪の黒髪を見せてもらったことを思い出した。

その時に、何十年も過ぎた黒髪があまりのあでやかさで輝いているのを見て、思わずぎよっと肩を引いたものだった。

私の髪も、あの時の智照尼の髪にひけをとらない艶やかさであった。

剪った髪は、中尊寺に収めた筈で、その時、その中の幾分かを、姉がとっておいてくれたのだと思う。その姉もとうに死んでしまったので、その時の事情を聞くことも出来ない。

私はその黒髪を展示会に出した。「源氏物語」の女人たちの次々つづく出家に、捧げるつもりであった。

10 現代語訳完成

1998年、76歳。4月2日、現代語訳第10巻完結。日
本橋高島屋で「完訳記念展」開催。ハワイ大学で講演。

「源氏物語という霊峰を踏破して」

〔瀬戸内寂聴と『源氏物語』図録〕1998年4月2日 講談社刊

生きている間に自分の展覧会がひらかれるなど、思ってもみなかった。今、源氏物語現代語訳全十巻の完成刊行をけじめとして、展覧会を開催してくれることになり、夢を見ているような気持ちができる。

思えば長い道のりであった。

二十四歳の夏、北京から引き揚げ、十年の後、三十四歳で、第三回新潮社同人雑誌賞を受け、作家として生きて行く道が定まった。その前、少女小説を書き、生計を立てはじめたのは二十八歳だったから、今年で四十八年間、物を書きつづけてきたことになる。

五十一歳で出家得度した時、もう書かせて貰えないだろうと覚悟も決めていた。それなのに、その後も出版界は私を見捨てず、むしろ、出家以前より、大きな仕事を次々と与えてくれた。そして、最後に、源氏物語現代語訳という大きな仕事まで完成させてもらうことが出来た。自分ひとりの力ではないと思っている。数えきれない多くの編集者の励ましと協力なくして、どの一枚の原稿も書き得たであろうか。

更にまた、無数の読者の熱い声援なくして、どうしてこの長

い歲月、物書きとして生きてこられたであろうか。

全生涯をここに振り返る好機を与えられ、いつその感謝の念に、すべてに向かつてひたすら頭の下がるばかりである。

場所の許す限り、展示物を呈出した。

本格的な寂聴展としては初めての試みの、この展覧会を、一人でも多くの方に見ていただきたいと思うばかりである。

この展覧会のため裏方に徹してあらゆる協力をして下さった方々には、お礼の申しあげようもない。

これを機に、再々度の新しい出発として、死ぬ日までペンを握りつづけてゆく。

「ハワイよいところ」

（朝日新聞「あした見る夢」に掲載 1998年11月1日）

ハワイに來ている。抜けるように青い空、白い雲、海辺の白砂、絵はがきのようなハワイが目の下にある。ホテルの窓からの眺めはあくまで明るい。私は陽気な性質と思いこまれているが、案外根のところは昏く、海より山が好きなのである。

ハワイの風景はあまりにも明るすぎ、物想いには適さない。

着いて以来、ハワイ大学でする源氏物語の公開講義「千年のラブロマンス」という原稿書きに追われていて、ゆっくり眠る

閑もない。

源氏の講演はもういやというほどやっているで、ノートなしでやれるのだが、通訳してもらうため、講義録をどうしても日本語で書かねばならないのである。

ハワイに來て、ホテルから出たのは、昨夜の小川郷太郎総領事主催の歓迎パーティーに招かれただけである。半年前からハワイ総領事になられたという小川総領事は、若くハンサムで優雅なかたであった。ハワイ源氏というところか。領事夫人は、つつましかだが知的で上品な、チャーミングな方で、実にお似合いのご夫婦であった。

天台宗ハワイ別院のご住職荒了寛師が、すべての手配をして下さったのである。

（中略）

話題は荒師の天台宗ハワイ別院宗ハワイの二十五周年の話と、源氏物語で盛り上がったが、私はハワイの方々の話題に強く興味を覚えた。

ハワイでは今、同性愛者の結婚をめぐる、論議がされているらしいが、何でも同性愛者の法的結婚を認めるといふ裁判に、裁判長がイエスを出したため、騒然となっているのだそう。

それに対する反対意見にイエスカノーかを求めるピラが州民

の間に、回っているという。

お話の中では、わからないという人もあれば、結婚は自由だが、法制化すると、全世界の同性愛者で結婚を望む人たちが、ハワイにどしどし集まってきたらどうなるかという意見もあり、なかなか活発な論議がわいて、私には面白かった。日本でもごく最近、女性が男性になる性転換手術が行われたばかりである。

おそらく、これまでの長い人類の歴史の中には、生まれつき両性具有者や同性愛者が数えきれないほど多かったであろう。

その人たちの、世間の良識という判断のもとで受けた迫害を想像すると、性的自由はもっと公平に認められていいと思う。わが国では源氏物語の昔から、男の同性愛は公然と認められていた。男色は色欲のひとつのパターンとして、不思議がられてもいなかった。

紫式部はレズ気があったのではないかという説もある。紫式部日記を見ると、同僚の若い女性の美しさをまるで男の視線のような感じで色っぽく描写している。

人が人を愛するのは生きる活力の源泉であろう。同性愛者が権利を主張しはじめたのも、その法制化を望むのも、自然の成り行きのような気がする。しかしこういうことが立法化するに

はまだ時間がかかりそうで、解決は二十一世紀に持ち越すのではないだろうか。

11 普及に飛び回る

1999年、77歳。三月、源氏大学の学長として各会場で講義（翌年七月まで。東京、大阪、横浜、名古屋、札幌、福岡、仙台、金沢、広島）。

現代語訳の副産物ともいえる「浮舟出家」に想を得た小説「髪」を1999年「新潮」10月号に発表。「髪」をもとにした新作能台本「夢浮橋」執筆。ロサンゼルス、ロンドン、パリ、シカゴ、ニューヨークで講演。

「源氏物語」から『藤村のパリ』へ

（読売新聞 1999年7月15日）

「源氏物語」の現代語訳が昨年三月終って以来、日本国中を駆け廻って、「源氏物語」の講演旅行につとめてきた。昨年には海外にも出向きはじめて、すでにハワイやロサンゼルスに

も出かけたが、それなりの反響と手応えがあつて、本も版を重ね二百十万部を越えた。また世界中の日本文学を研究してくれている学校などにも自費で数十組を寄贈して喜ばれてきた。

一人でも多くの人々が「源氏物語」を読んでくれる嬉しさはこの上もなく、生きていてつくづくよかったと思う。

今度はロンドンとパリへ行つてきた。

六月二十一日には、ロンドンのウエストミンスターホールで講演した。空港からホテルへ着いて二時間後に講演開始という殺人的スケジュールだったが、時差を感じないという奇妙な体質のおかげで、会場一杯の聴衆を前にすると、例によつて私はすっかり張り切つてしまい、立つたまま水も吞まず、一時間半、いつもの通り喋り通した。

駐英大使の林御夫妻もお見え下さつて、聴衆の反応も極めてよく、まずは成功裡に終わった。

そもそも「源氏物語」はアーサー・ウェイリーの英訳で世界に知られたものである。ドナルド・キーン氏も若き日、偶然古本屋で、山積みになっている本の中から、一番頁数が厚く、最も値段の安かつたウェイリー訳の本を手に取り上げたのがきっかけで、「源氏物語」の面白さに惹きこまれ、爾来日本文学にのめりこんでいったと話されている。この英訳をテキストにし

て、世界の様々な国にも訳されて、日本最大の文化遺産として誇る「源氏物語」は伝わり知られてきた。ある時、外国人記者クラブの会で、「我々は日本に転任する時は、上司から必ず源氏物語を読むようにと命じられています。源氏物語を読まない」と日本の文化の本質も日本人のものの感じ方、考え方もわからないからと言われるのです。ところが日本に来てみると、ほんどのインテリが源氏物語を読んでいるので驚きました。どんな質問をしても答えが帰つてこない」

と外国のジャーナリストから言われた時は恥ずかしかった。ロンドンの聴衆は日本人がほとんどなので通訳を必要としなかったが、六月二十五日のパリ日本文化会館大ホールでは、フランス人の聴衆が多く来られたので通訳がついてくれた。館長の磯村尚徳さんが、流暢なフランス語で私と通訳をしてくださるフランソワ・ラシヨウさんを紹介してくださった。

ラシヨウさんは三十代の若い学者だが、日本文学研究ですでに博士になっていられ、日本の古典文学の造詣の深さでは、日本人も顔負けという方であつた。日本の古典文学と仏教の関係をテーマに研究していただけることで、私との出逢いをとて喜んで下さった。

何の打ち合せもなく、ぶつつけ本番の原稿なしの私の講演内

容を、すばらしい理解力と正確な源氏物語解釈で、よどみなく通訳して下さい。ラショウさんの名通訳のおかげで、フランス人からの多くの質問も出て、それに答えることが出来たのが何より嬉しかった。

ラショウさんに通訳を頼まれる日本人も多いそうだが、ラショウさんは、

「私は通訳者ではなく、学者ですから、学問以外のことは断っています」

と笑っていた。フランスの「源氏物語」はフランス語の古典による訳なので、今の人には難しく、私の源氏訳のように新訳が必要だと嬉しいことを言ってくれる。

プロジェクトを組んで、若い学者たちの間で今昔物語の訳をやりはじめているという。

話していると、魔訶止観などという天台宗の仏教語もすらすら口をついて出てくるという仏教学者でもあった。やはりドナルド・キーン氏と同じように、学生時代、偶然、アーサー・ウェイリーの英訳の源氏物語を古本屋で手にしたのが縁で、日本文学に導かれたといわれる。キーンさんは私と同じ年の七十七歳だから、ラショウさんが、私たちの年頃になれば、キーンさんのように日本古典文学の外国人の第一人者になっていられるだ

ろうと頼もしくなった。

12 朗読・新作能・歌舞伎と舞台上演相次ぐ

「新作能『夢浮橋』の誕生について」

(図録『源氏物語の世界』2002・5・28 講談社刊)

平成十一年(一九九九)のはじめ、梅若六郎さんが寂庵へ見えて、新作能の台本を書いてみないかというお話をいただいた。私はお能は観るのは好きだが、台本を書いてみたいなど一度も考えたことがないので、びっくり仰天した。

梅若さんは、私の狼狽ぶりに一向に動じないで、「源氏物語」で書いてほしいとねばられた。梅若六郎さんが、伝統能の名人でありながら、新作能にも意欲的で次々新しい能を演じられているのは識っていた。「源氏物語」の訳業が終わり、いかにして源氏物語を普及するかに心を尽くしていた時だったので、源氏の新作能と聞いては心動かぬ分けでもなかった。しかし、もし失敗したらとおびえ、心が臆していた。迷ったあげく、書くことを引き受けてしまった。

ところがいざなると、源氏物語の名場面というのは、すべて古典能に取り入れられていて、新作能の出る幕はなかった。

そこで私は、「源氏物語」の訳業の副産物のような、私の「髪」という短編を、能にすることを思い立った。幸い梅若さんもそれは面白いと賛成してくださった。「髪」は、浮舟の剃髪の時、横川の僧都の命令で、浮舟の長い黒髪を剪りとする役目をした僧侶を主人公にしたものである。原文では、几帳の外に浮舟の手でかき出された黒髪を、几帳の外で僧が手に取り、鋏を入れる。その時、黒髪のアマリの美しさに、手の鋏をもてあつかいかね、一瞬ためらってしまう。その一行が私の創作欲を書き立てたのであった。

女犯を断っていた修行一途の聖僧が、女の黒髪の美しさと感じ、一瞬にして煩惱をかきたてられ、ついに山を脱走して、破戒僧として諸国を流浪するという小説にした。短編で、三十枚くらいの原作であった。

それを能の詞章にする時、やはりそれなりの苦労があった。梅若さんは詞章は現代語でもいいといってくれたが、古典能に挑戦するからには、昔の文章にしたかった。

そうして脱稿したのは一九九九年の十月のことであった。

長く書いても必ず削りとられると聞いていたので、私はせいで煮つめて頁を少なくしたが、結局、削りに削られて、最終的には四分の一にも満たなかった。往復葉書くらいになったと

私は冗談を言った。ところが、それが舞台にかかると、何ともいえずすばらしい幽玄能に仕上がっていた。ひとえに演出の梅若六郎さんと山本東次郎さんのお力のおかげであった。

阿闍梨・梅若六郎さん、匂宮・金剛永謹さん、浮舟・梅若晋矢さんという方々の上演で予想以上の好評を得て、初演平成十二年三月三日以来、現在までにすでに十二回の公演を果たしている。この時のポスターを横尾忠則さんに描いてもらい、これもまた話題を呼んだ名作となった。

2001年、79歳。歌舞伎座で台本を執筆した「源氏物語 須磨・明石・京」上演。

2002年、80歳。ローマ、ミラノで講演。展覧会『源氏物語新装版』完結記念 源氏物語の世界 ―瀬戸内寂聴と新たな展開― が5月、日本橋三越を皮切りに開かれる。

『源氏物語の世界』展によせて

〔図録『源氏物語の世界』2002.5.28 講談社刊〕

この展覧会は、「瀬戸内寂聴と新たな展開」というサブタイトルがついている。

私の瀬戸内寂聴現代語訳『源氏物語』の巻一が出版されたのは、一九九六年（平成八）の十二月であった。いまだ六年前のことになる。全十巻の最終巻が出版されたのは、一九九八年（平成十）四月であった。

訳し始めて完成までに六年の歳月が流れたが、準備の年をいれると、私はこの訳業に十年の歳月を費やしている。仕上った時は、私は七十五歳になっていた。

（中略）

源氏物語は世界に誇るわが国の文化遺産のなかで、最高第一のものである。国民のすべてがそれを読み理解しておかなければならない。私は大先輩たちの志をついで、更に平易な親しみやすい現代語訳をして、その普及に尽くすべきだと思った。ものを書いて四十年も生きさせてもらった者の義務だと思った。非才をかえりみず、全身全霊をこめて、この訳業に取り組み、達成したのであった。更にできあがった源氏物語の普及に全力を傾け尽くした。テレビにラジオに、公演にと、あらゆるメディアを使って、私は源氏物語のPRにつとめた。

前の展覧会は全国を廻行し、私はその都度欠かさず出かけて

行った。その努力が報いられ、寂聴訳『源氏物語』の完成以来、急速に源氏物語ブームが巻き起った。

源氏物語に関する書物が続々と出版され十二単の王朝風俗が、あらゆる場所に出現しはじめた。

やがて、歌舞伎になり、新作能になり、宝塚の舞台にかかった。富田勲氏は交響楽にして、ロンドン、パリで公演した。私はその公演の度、客に挨拶するため出かけて行った。

ニューヨーク、ハワイ、シカゴ、ロサンゼルス、パリ、ロンドンなどで、源氏物語の講演に招かれた。国内では毎月、何か所も講演しつづけた。

着物や帯の図柄まで源氏物語が多くなった。ブームの勢いは空前と言ってよかった。

おかげで、私の『源氏物語』は二百三十万部を越し、今も読まれつづけている。新しく版を小さく改め廉価にして、若い人々にも求めやすくした新装版も刊行した。

源氏物語の普及のためには、私は死ぬまであらゆる労力と努力を惜しまないつもりである。

幸い、吉永小百合さんの紫式部で映画にもなり、読者を増やした。驚いたことは、私の訳本を朗読してくれる公演が銀座の博品館劇場で、女優さん・声優さんたちによって競演され、圧

倒的な人気を博したことであった。四年目の今年は、幸田弘子さんのような朗読の大御所から、有馬稲子さん、水谷八重子さんのような大女優さん、李麗仙さん、上原まりさん、穂谷友子さん、平野啓子さんのようなベテラン、また若い西田ひかるさんや飯塚雅弓さんのような人気女優さんまで喜んで出演してくれた。

三田佳子さんと中村橋之助さんのオーディオ・ドラマ源氏物語も、大変な人気を呼んでいる。

予想を上回るこの源氏ブームを目前にみて、平成の現代語訳者としての私は、今夜死んでもいいくらいの幸福感に満たされている。

新作能や歌舞伎の台本まで引き受けてしまったのは、その気持ちの高ぶりのなかであった。ひそかに準備していたとはいえ、書きはじめたのは、七十歳になってからであった。仕上げるまで命が持つかと、そればかり心配していたのに、無事仕上がって、この華やかなブームを見ることができたのは、実に幸運であった。

今度改めて、日本橋三越本店を皮切りに「源氏物語の世界」展を開催してくれることになった。これまでの、「瀬戸内寂聴と源氏物語」展との違いは、私の源氏物語が出版された後のブームの行方を、すべて集大成して観せてくれるというものである。

歌舞伎の源氏物語で、光源氏の新之助、頭の中將の辰之助（現・松緑）、紫の上の菊之助さんたちの舞台衣装から、新作能の梅若六郎さんたちの能装束から、ホリ・ヒロシさんの「宇治十帖」の人形から、草乃しずかさんの華麗な源氏物語デザインの日本刺繍作品などまでが並び、源氏物語のブームの裾野の広さを展開している。

更に目を奪うものは、私の本の装幀、装画をして下さった石踊達哉画伯の壮大な原画や新装版の堀川理万子さんの花々の原画が並ぶことと、今回特別に初出品してくれた、国宝「源氏物語絵巻」を最新のデジタル技術で、描かれた当初のものに復元された画の映像化である。特別参加の大和紀さんの「あさきゆめみし」の原画も展示されている。

こんな絢爛豪華な源氏物語の展覧会は、またとは見られないであろう。長く生きていてよかったと、またしても幸せをしみじみと噛み味わっている昨今である。

13 創作「藤壺」を発表

2004年、82歳。「群像」一月号に「藤壺」を発表。

単行本化にあたっては、大幅に改訂し、古文でも表現した。

インタビュー

(2004年11月10日「有鄰」第444号)より

「帚木」の帖が源氏が17歳のときに、ラブハンターとして一人前になったというところから始まっているんですが、その中に、藤壺との関係について「去年そういうことがあった」というのがあるんです。

でも、去年あったことは書かれずに、二度目の藤壺との密会から事が始まる。だけど一番最初があったはずだと、私だけではなくて、いろいろな人が昔から思っていたんです。そのところを、もしあればどうかというので、私はそこを書いてみたかったんです。

14 文化勲章を受章

2006年、84歳。文化勲章受章。

文化勲章受章理由

多年にわたり、小説家として日本近代の自我に目覚めた女性たちの姿を描くことによって多くの人々を勇気づけ、さらに出家得度後には自身の切に生きる姿によって独自の文学世界をつくりあげ、世代を越えた支持を受け、斯界の発展に大きく寄与した。

氏は一九六〇年代、女性の生き方を真正面から問う小説家として、とりわけ女性の読者から圧倒的な支持を受けた。人間の愛と性の問題を、日本の高度成長のなかで経済的かつ精神的に自立しはじめた女性たちにふさわしいかたちで差し出した功績は際立っている。小説と伝記、フィクションとノンフィクションという二つの形式を巧みに使い分け、またときには緋い合わせる独特の方法は、読者に広く迎えられたが、氏にはより先鋭に自身の生き方そのものを問う結果をもたらすことになった。昭和四八年、得度し、晴美から法名寂聴を名乗る。以後、煩惱のありようをより自在に説き、小説の読者をも越えたさらに広い聴衆に向かって語りかけることになり、その影響力は、得度後も書き続けられた小説や伝記、評論とともに、きわめて大きいものとなった。法名の「寂」の一字にその文学の特徴がよく示されている。小説や伝記に描かれているのは女性たちの激し

い生き方だが、その底に流れているのは、生きることの寂しさ、その寂しさを分かち合う優しさにはかならない。氏は、出家得度とその後の仕事によって、日本文化のひとつの典型を身をもって生きたと言ってよく、源氏物語の現代語訳を完成させるなどの偉業とともに、まさに顕彰に値する。

15 「源氏物語千年紀」を迎える

2008年、86歳。「源氏物語千年紀」―「源氏物語」が書かれていることが「紫式部日記」で確認されてから千年。その実行委員会の中心として、各地の催しや講演に東奔西走の日々となる。

「女が救われるために」

(2007・11・27発行「yomiyom」より)

文学少女だった私は、それまでに岩波文庫などで海外の小説をずいぶん読み漁っていたが、トルストイにもドストエフスキーにもスタンダールにも負けない紫式部の筆力に深く魅せら

れた。しかも紫式部は、彼ら西洋の文豪たちより八百年も前の人物で、おそらくはあまり器量の良くなかったオールド・ミスであり、やっと結婚した夫とは三年ほどで死別した、一人の寡婦にすぎないのだ。大昔のそんな女性が、かくも華麗で、複雑精妙で、さまざまな魅力に満ちた、巨大な伽藍のような世界を描ききったのである。

あれから七十年以上がたった今、私が若い人たちに伝えたいのは、『源氏物語』は日本が世界に誇る、世にも面白い小説ですよ、という一点に尽きる。私が十三歳の時に味わったあの面白さを伝えたい一心で、七十歳を過ぎてから『源氏物語』の現代語訳などという無謀な企てに取りかかったのである。

(中略)

どの男が好きかとよく聞かれるが、恋のために淡雪のように死んでいく柏木(頭の中將の息子で、源氏の妻である女三の宮と密通する。薫大将の本当の父)が、この大長篇小説中で私の一番好きな男である。

では『源氏物語』のどこが面白いのであろうか。

それは、紫式部が天性の小説家として、人間関係の綾と心理の洞察と小道具の巧みな使い方で次々と小説的な場面を作っていく、その小説作りの天才的腕前に尽きるだろう。また、登

場人物としては、主人公の光源氏よりも、むしろ彼に言い寄られる女性たちや、頭の中將や朱雀院（女三の宮の父）などの脇役たちのほうが、読んでいて感情移入もできるし、リアリティもある。

（中略）

「宇治十帖」では、匂宮（源氏の娘と帝の間にうまれた皇子）と浮舟（源氏の腹違いの弟の娘）を逢わせないために、浮舟の女房が「急に穢れになってしまいました」と嘘の理由を述べるところがある。「穢れ」というのは女性の月のさわりのことで、私の少女時代にも生理の日には神社に行っても鳥居の中には入れなかったものだが、世界文学史上、月経を小説の小道具として巧みに仕立て上げたのは紫式部が初めてであろう。

この浮舟という姫君は、精神的には薫大將（源氏と女三の宮との子。実は柏木と女三の宮との不義の子である。）を尊敬し大事に思いながら、肉体は匂宮とのほうに強く惹かれる、という具合に描かれる。こういう「精神と肉体の乖離」を描いたのも、やはり文学史上「宇治十帖」が初めてではないだろうか。そして精神と肉体の乖離に引き裂かれそうになった挙句、今の女性ならばそれくらいのは平気であろうが、浮舟は罪の意識から川に身を投げ、あやうく一命はとりとめたものの、やが

て出家の道を選ぶ。

浮舟の出家が、『源氏物語』という大長篇小説のラストにもなるわけだが、昔からこの結末は「不思議だ」とも「いくぶん寂しい」とも言われてきた。そのせいもあって、あんなに面白い「宇治十帖」なのに、紫式部以外の人によって書かれたものだ、いや、そもそも未完なのだ、などという説さえあった。私も以前はこの終わり方に何となく腑に落ちないものを感じていたが、私自身が中尊寺で出家して剃髪してから、あれはハッピーエンドなんだ、あれこそが紫式部が書きたかったことだ、と思うようになったのである。

（中略）

なぜ女性たちが出家していくかといえば、光源氏との愛を断ち切りたいのだ。もちろん源氏との愛ゆえの喜びもあったろうが、例えば嫉妬とか憎しみとか迷いといった、それまで知らなかった苦しみも味わってきた。そういう愛執が出家することによって吹っ切れ、解放され、浄化されるのだ。それを私は自分が出家することで身をもって理解できた。私は髪を下ろした瞬間に、あらゆる世のしがらみや迷いから抜け出せて、譬えようのない幸せを感じた。これは出家した者しかわからぬことであろう。私が自分の手で『源氏物語』を訳してみようと決意した

のは、この理解がきっかけである。

「心の丈」と私は呼ぶのだが、出家した女性皆、心の丈が高くなる。心の丈が高くなって、彼女たちは源氏に対する未練を捨てきり、むしろ光源氏を見下ろしているかのようにさえ見える。

(中略)

仏教では、女人は成仏できない、という教えがある。けれど、本気で出家し、心の丈が高くなれば、女もきつと成仏でき、救われるのだ、と紫式部は言いたかったのではあるまいか。そのことがとりわけ明確に現れているのが、「宇治十帖」のしめくくり、「夢浮橋」の巻である。浮舟は田舎育ちで、数珠の巻き方も知らない、お経のあげ方も知らないという設定になっているにもかかわらず、薫大将の誘いもきっぱりと断り、揺るぎない信仰の道に入っていく。そして、仏のもとで浮舟は心穏やかに浄福を味わうという結末なのである。

一方で、薫大将は出家した浮舟をなおも追いかけ回し、相手にされなかった末に、「きつと浮舟はどこかの男に囲われているのだ」などと思う。薫は仏教に傾倒し、出家にも常に憧れている男として描かれてきたのに、この期に及んでまだこんな通俗な低級な想像しかできない。紫式部の「女は救われるけど、

かえって男のほうが救われないのよ」という声がきこえるようではないか。

インタビュ―「瀬戸内寂聴が語る『源氏物語』
―千年の歴史を超えて―」

(PHP) 2008・2・1 より)

小説としての面白さが魅力

――『源氏物語』が今日まで読み継がれてきた魅力は、どこにあるのでしょうか。

小説としての面白さにつきます。登場人物の一人ひとりの性格を書き分け、しかも、会話がすぐく気が利いていて、私が十三歳で初めて与謝野晶子さん訳の『源氏物語』を読んだときも、あまりの面白さに感動して途中でやめられなかったくらいでした。『源氏物語』はそれだけの力を持った小説です。

近頃は面白くない小説が上等的のように言われますが、小説は面白くなければなりません。『源氏物語』がこれだけ長く読み続けられ、また、世界で読まれているのも、面白い小説だからです。

源氏物語は世界の文化遺産

――ご自身も『源氏物語』の現代語訳に取り組もうと思われた

理由は。

『源氏物語』は、日本が誇るべき世界的な文化遺産です。外国の人からは、「こんなすぐれた文学を生み出した日本を尊敬する」と言われるのに、肝心の日本人はほとんど読んでいないのが実情です。

自分の生まれた国に誇りを持たなければ、人間は立派になれません。そのために『源氏物語』を読んでほしいのですが、最も入りやすい円地源氏ですら、「むずかしくて読みにくい」という人が増えてきて、ますます読まなくなってきました。危機感をいだいた私は、日本人に誇りを持つてもらうためにも、子どもからお年寄りまでが読める現代語訳を出したいと思って、取り組んだわけです。

——ご苦労なさった点は？

原文には、主語はありません。読みやすくするために、敬語の使い方で主語を想定して入れ、センテンスの長いところは短く分けて、歯切れよくしましたが、原文にないものは加筆せず、忠実に書いています。ただ、三人の名訳を並べて一行ごとにそれぞれに使われていない言葉を探さないといけないために、予想以上に時間がかかりました。

文化は心の栄養になる

——出家されたことで、『源氏物語』の見方に変化はありましたか。

光源氏が愛した女性のうち、藤壺、空蝉、御息所、朧月夜など七割までが出家しています。当時は、今よりもはるかに仏教の戒律が厳しく、光源氏ほどのドンファンでも、二つの恋の禁忌がありました。一つは、血の繋がった母娘の両方とは深い関係にならないことと、もう一つ、尼僧には絶対に手を出してはいけません。

恋は喜びだけでなく苦しさも伴うもので、恋愛をしたときから苦悩が始まります。その苦悩に耐えられるだけの愛を与えられればよいのですが、そうでなければ、耐えきれものではありません。源氏との恋に悩んだ女性たちが次々と内密に出家したのも、源氏との関係とともにその苦しみを断とうとしたからです。源氏はそうと知って、取りすがってよよと泣きます。その瞬間、それまで源氏の愛にすがろうとしていた女性の心の丈がすっと高くなり、源氏を見下すような形になるのです。

私は自分が出家してみても、いかに心が解放され、自由になるかを実感しました。出家の功德を身をもって味わったことで、源氏の女性たちが安心する感じはよくわかります。

——仏教の影響があったということですか。

紫式部は書くうちに、女人成仏が可能かどうかを考え、浮舟の出家によってそれが可能だという結論を出したのだと思います。かわいそうなのは紫の上で、小さいときから源氏の家に連れてこれ、源氏好みの理想の女に育てられてきた彼女は、出家したくともさせてもらえず、とうとう苦しみのうちに病死してしまします。

紫式部は最初、源氏を主人公にして書き出したのですが、自分が創り出した女性たちの魅力に惹かれていったためか、男性より女性のほうがはるかに魅力的です。『源氏物語』は、光源氏を狂言回しにした女性の出家物語だともいえます。

——『源氏物語』はどのように楽しめばよいのでしょうか。

小説や音楽、芝居などの文化は、なくても人間は生きていきます。しかし、脳や心にも、体と同じように栄養が必要です。文化は精神の栄養でなければなりません。文化に力を入れない国はいずれ滅びます。

幸いにして、日本は、東洋の小さな島国でありながら、千年前に『源氏物語』が書かれるほどに文化の高い国でした。それは国民の誇りにしてよい。でも、最近はその文化が、だんだん衰えています。物質的には豊かであっても、心にまでは栄養が

行き渡っていないのです。

食べ物がいれば、体の栄養になるように、読んで面白いと思う物語は心に栄養を与えます。『源氏物語』はその代表で、いつの時代であっても変わらない恋愛や人生の苦悩が真正面から描かれ、恋愛のテクニクから人間の性（さが）や、人生の哀歓までが詰まっています。読む人の年齢や経験によってその味わいは異なってきます。

これから『源氏物語』を読む方は、「どういうふうに読めばいいのか」などと考える必要は一切ありません。「面白い」と感じたら、ただそれだけでよいのです。私の現代語訳の朗読でも、若い方には大和紀さんのマンガ『あさきゆめみし』でも、どんな形でもいいから、まず『源氏物語』に触れてみると、その面白さや魅力がわかることでしょう。

徳島県立文学書道館紀要「水脈」に2008年に発表したものを、一部改訂して再録した。